

「文学と社会」・「文学と人間」

渡辺 憲二

小生の授業の様子を始めに少し記しておいたほうが以下の反省が御理解されるのではないかと思います。前期「文学と社会」の授業では、最終的に提出する藤沢周平の「蝉しぐれ」のリポートを如何にまとめるかを学生の課題となるように考え、それに向かって、前提となるような予備的な知識を講義しました。留意したのは、単に、藤沢周平の固有の問題（例えば、伝記的説明とか、他の作品との比較といったことではなく）を提起するのみではなく、作品や作者の意識の背景にある江戸時代の物の考え方、近代化されることによって見失ったもの、それらとの呼応関係といったことです。「蝉しぐれ」は、青春小説ですから、江戸時代の若い人々が自己をどのようにとらえていたかについても考えておきたいと思いました。伊藤仁斎を始めとする江戸時代の儒者の人間観を、始めに考えようとしたのも、このためです。儒者達が江戸時代にヒューマニズムを如何に考えていたかについて考えてみたいと考えました。作品を作者と切り離して読んで見たいとも思いました。演習など受講生が少ない場合は、学生との意見交

換を基にしながらかえることも出来るのですが、全カリではこれがかなり困難です。授業は一方向的講義にならざるをえません。

後期「文学と人間」では山本周五郎の「さぶ」を最終的に如何に読み込むかということが課題でした。前期と異なっていたのは、山本周五郎の履歴に拘った講義をしたことです。作者と作品とを重ね合わせて読んでいくという立場をとってみました。〈家族〉と自己を切り離しながら作品世界を構築した周五郎の姿勢を、読み込んでみたいと思ったからです。

以上のような授業でしたから、私からの一方向的なものになり、知識を深めるといったこととは異なった授業になりました。TAも、何をサポートしているか戸惑ったのも当然と言った授業でした。

2000年度TAをお願いしましたが、その活用は十分でなかったと反省しています。その理由は、先に記したような授業形式そのものにあるのですが他にも理由が考えられます。

①1999年度を受講生が400名とかなりの数に上り、授業の体制に補助的な役

割を期待して、2000年度TAをお願いしたが、2000年度は、受講生が134名であったこともあって、答案整理など事務的な処理は、事務室のサポートで十分であった。

② 講義の場所が、新座であり、TAにとって、時間的な負担が多くなった。

③TAが、修士論文提出と重なったため、依頼が出来にくくなった。

TAに具体的に依頼したのは、教材の準備とコピーであるが、この点は集中的に4月の間にほとんど終わり、それ以降は、受講生に授業の相談などがあった場合に、TAにもアドバイスをもらうように指示したが、数名の相談があったに止まり、相談の多くは、直接教員にあった。

映像の活用や複数の教員による授業形式のものなどがあり、一概に言えないのですが、私の科目展開のように一方的な講義形式の場合のTA活用は、実質的にかなり難しいというのが実感です。

TAの本来の目的が、曖昧な形で進められてきていることにも一因があるのではないかと思います。教員の負担軽

減のみならず、受講生へのきめ細かなサービスという側面が十分認識し得ていなかったのではないかという自己反省も残ります。又院生の将来の教育活動に対する教育目的という側面も活かし切れなかったようです。

全カリでのTA活用は、専門科目のTA活用とは異なり、受講生との間の関係性が希薄であり、授業相談に乗ることも困難であり、受講生にこの制度が活用されているかどうかは十分今後考慮する必要があるでしょう。この制度の最も重要な点は、受講生つまり学生の側がTA制度によって、いかなるサービスの向上を受けることが出来たかという点にあります。今後は、教員のみならず、受講生の声を十分に咀嚼し、活かしていくことが必要でしょう。科目内容の十分な把握によるTA配分、専門の学部演習科目などへのTA活用の幅を増加させる方法、博士課程後期の学生への活用などを今後の課題とすべき時期に来ているのではないかと考えています。

(わたなべ けんじ 本学文学部教授)